慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ハロルド・ラスキー 現代革命の省察(Harold J. Laski; Reflections on the Revolution of our Time, 1943.) を読む
Sub Title	Reading "Reflections on the revolution of our time," 1943. by Harold J. Laski
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1950
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.43, No.6 (1950. 12) ,p.431(67)- 446(82)
JaLC DOI	10.14991/001.19501201-0067
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19501201-0067

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

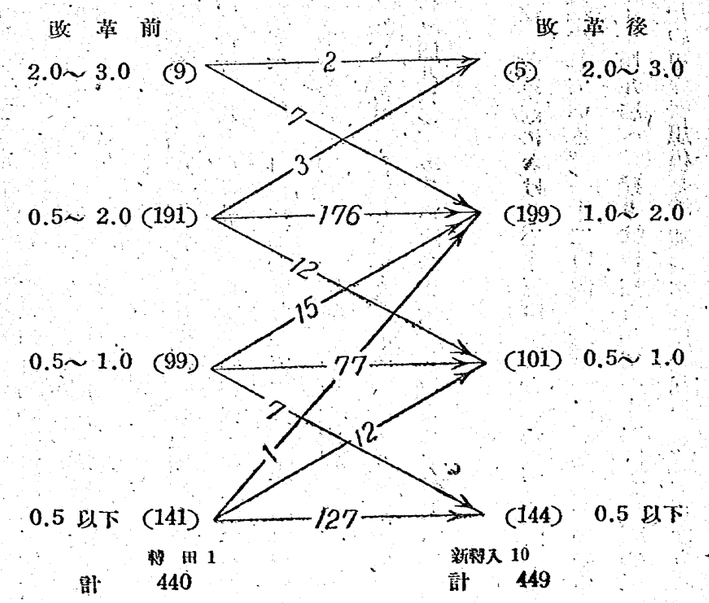
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

かくして、我國農業の零細性の廢絶は今次の農地改革の直接の目標ではあり得なかつたのであるが、耕地の零細性と分散性の問題は將來の問題として殘されるに至つたのである。

(2) むすび

農地改革の具體的展開を通じてそこに多くの問題をみたのであるが、農地改革所期の目的の如く日本の半封建的寄生地主的土地所有制を、その過程において如何なる反革運動を試みようとも、根本的に廢絶したものであるといつて過言ではない。特殊な場合を除き、一般的に云つて、農地の解放と高額物納小作料の金納化の實施は地主制に決定的な打撃を與えたのであつて、とゝで我國の地主制は一大變貌をとげたのである。小作より解放された一度自作化せられた農家經濟は供出、米價、稅金、インフレーション、シェーレの諸條件の下に、農地の零細性を克服し得なかつたまゝに、益々破綻に落し入れられつゝある。とまれ、再び地主制の復活は無いまでも、一度形成せられた農地改革の成果が充分伸張し得ずして、益々深刻する問題の將來が豫想されるのである。

金目村　經營規模農家戶數變化表（單位　町）



ハロルド・ラスキー『現代革命の省察』(Harold J. Laski; Reflections on the Revolution of our Time, 1943.) を讀む

飯田　鼎

私は正直である。そして私が死なない前に人間らしい世界を見たいとねがつてゐる。
――ラスキ――

一

かつてシドニー・ウェッブ (Sidney Webb) は、『ロンドンスクールに誇るべきものが一つある。それはハロルド・ラスキーを有することである』と語つたそうであるが、ラスキーこそは英國勞働黨の理論的指導者として、その識見の高邁なることにおいて、その知識の該博なることにおいて稀に見る俊才であつた。年わかくして主權否定の研究に異常な興味を抱き、いわゆる多元的國家論者として、メートランド (F. W. Maitland) フイギース (J. N. Figgis) の遺鉢をついで、ジー・ディー・エイチ・コール (G. D. H. Cole) とともに多元的國家論を主張し、國家のみに唯一絶對の人格を認めることに反對し國家を神秘の世界から引き下して俗世の生活に投じ、それ自身獨立の目的と職能と生命とを有する點においては、國家といえども教會、大學、組合等の部分社會と同一視さるべきことを絶叫したことは余りにも有名である。[1] そして多くの著書において、個人の自由を强調し、國家からの個人の解放を說く點においては、英國傳來の自由主義的な政治學者であるにも拘わらず、マルクス主義に對して極めて同情的である點において特種な立場をとり、二十世紀英國思想史上に比類なき異彩を放つている。

彼がマルクス主義にどの程度同情的であつたかは、一九二七年の共產主義論 (Communism, 1927) 以來、「危機にある民主主義」(Democracy in Crisis, 1933)「理論と實踐における國家」(The State in Theory and Practice, 1935)「ヨーロッパ自由主義の興起」(The Rise of European Liberalism, 1936) と矢次早に發刊された主な著作が、極めて批判的でありながらも、しかもなお多かれ少なかれ、マルクス主義國家觀、乃至は唯物史觀をその根底に藏していたという周知の事實によつて明らかであろう。

英國的自由主義――しかもその背後に横たわるものは、ほかならぬジェレミー・ベンサムの功利主義であるが――が英國勞働黨のイデオロギーの少くとも重要な一要素であることを思う

とき、勞働黨の優れた理論家としてのラスキーがマルクス主義に同情的であるという事實は、勞働黨それ自身の運命にとつて容易ならぬ問題であるとともに、これは亦、思想する人々に對しても、汲めどもつきぬ深い示唆を與えずにはおかないであろう。まことにこのような意味からも、ラスキーの思想體系は研究に値する好個の題目たるを失わない。

一九五十年三月二十四日、肺炎のためにたおれ、わづか五十六歳をもつてその輝かしい生涯の幕を閉ぢたラスキーは、生前次のように人に語つたという。「私は私自身について別に述べるべきことがあるとは思つていない。ただ私は正直である。そして自分が死なない前に、人間らしい世界を見たいとねがつている」と。現代の世界がラスキーのいう「人間らしい世界」といかにかけ離れているかは、二つの世界の對立が熱く激化している今日、何人の眼にも明らかであるが、それにもかゝわらず、現代人の苦悶は、いわばこの「二つの魂」の闘爭を半ば宿命的なものとして觀念しながらも、その中に活路を見出そうとする努力に胚胎する。ラスキーによつて「人間らしい世界」として想われた世界が、たとえどのようなものであろうとも、少くともこの言葉の中に、ラスキーの現代社會に對する限りない不滿と民主主義世界に對する底知れぬ焦慮を汲みとることは出來ないであろうか。……ラスキーは「現代革命」の省察と題する本書において、何よりも先づ社會改革の必要とデモクラシーの新しい認識とをわれわれに說いてやまない。

（註）多元的國家論に關する代表的な著作として以下のものは注目に値する。

Lord Acton ; History of Freedom, 1907.
F. W. Maitland ; Political theories of the Middle Age, 1900.
J. N. Figgis ; Divine Right of Kings ; 1896.
〃 ; From Gerson to Grotius ; 1907.
〃 ; Churches in the Modern State, 1913.
Harold J. Laski ; Problems of Sovereignity, 1917.
〃 ; Anthority of Modern State, 1919.
〃 ; Foundations of Sovereignity, 1920.
〃 ; Grammar of Politics, 1929.
〃 ; Communism, 1929.
G. D. H. Cole ; Social Theory, 1920.
R. M. MacIver ; Community, 1917.
〃 ; Elements of Social Science, 1926.
〃 ; Modern State, 1926.

二

一九四三年（昭和十八年）に初めて公刊された本書は、最近までに數版を重ねたという事實によつて、江湖の歡迎を受けたことが推察し得るのであるが、しかしそれよりも、卓拔な筆致と圓熟した思想とをもつて、かねてから抱懷していた改革の熱情を吐露した力作であつて、かのエドマンド・バークの名著「フランス革命の省察」(Edmund Burke, Reflections on the French Revolution, 1890.) にも比すべき抱負と氣慨をもつて、まとめ上げられたことは注目されなければならない。由來ラスキーの文章は難解をもつて有名であるにも拘わらず、（註1）この書は又實に平明に書きつづられ、一度手にするや、最後までひきつけてやまない魅力を備えている。

本書の具體的な內容に入る前に、先づわれわれはこの書が出版された一九四三年が一體どのような年であつたかを、あらためて概觀することが便利であろう。一九四一年十二月、日本民族にとつて、まことに悲劇的な無暴な戰爭が勃發することによつて、第二次世界大戰はかつて見ざる深刻な樣相を呈するとともに、それは又その未曾有の大戰爭が最終段階に突入したことを意味した。

而して一方既に歐州においては、ドイツを中心とする反民主主義軍と米・英並にソビエットを打つて一丸とする民主主義陣營との間に、死の苦鬪が展開せられ、時の英國首相チャーチルをして、『自分は過去二十五年間ボルシェヴィキの敵であつた。しかしヒットラーと戰うものは、何人もわれわれの友である』といわしめ、スターリン首相は『この解放戰爭において吾々は孤立していない。祖國の自由のための吾々の戰爭は、ヨーロッパ及びアメリカ諸國民の獨立と民主的自由のための闘爭と合流している』と絶叫した時代であり、それは正に、モスクワ・レニングラードの防衛において、ロシヤ人はロンドンをニューヨーク、ワシントンを防衛していた時代であつた。（註2）

そしてついに一九四三年十一月には、いわゆるポツダム宣言の母胎ともみられるカイロ宣言及びテヘラン宣言が公表され、反民主主義陣營の運命に暗雲がさし始め、民主主義陣營に最後的勝利が確信されつゝあつた時代である。われらはラスキーを讀むに際し、何よりも彼をとりかこむこのような時代的な意義と歴史的な流れを頭に思い浮べなくてはならない。しかしながらこのような破壞、無秩序混亂の時代にあつて、早くも此れを一つの大いなる革命の時代として把握し、現代をもつてローマ帝國の沒落や宗教改革の時代に擬し、更に又フランス革命の時代にも比肩しうるとして、現代の意義を舊制度の破壞と、新社會の誕生のための苦悶の時代として理解した人こそ、ハロルド・ラスキーその人であつた。

だがそれのみではない。現代を單に『嵐と熱狂の時代人』と

して把握するためには、われわれは必ずしもラスキーをまつ必要はない。チャーチルもルーズヴェルトもよく此れをなしたであろう。ラスキーによつて理解された現代の革命的意義は、ファシズムの擡頭によつて著るしく脅威をうけた古きデモクラシーの脱皮の過程において、苦しくも甘受しなければならぬ必然性の苦惱である。

（註1）例えば初期の傑作、Political thought from Locke to Bentham

（註2）世界八月號所收、畑中政春氏「あの頃を思ら」

※

本書は八章から成つている。即ち

第一章　時代精神について（On the Spirit of the Age）

第二章　ロシヤ革命（The Russian Revolution）

第三章　ファシズムの意味（The Meaning of Fascism）

第四章　窮地にある民主主義（Democracy at Bay）

第五章　民主主義の内部的諸條件（The Internal Conditions of Democracy）

第六章　國際狀勢（The International Aspect）

第七章　反革命の脅威（The Threat of Counter-Revolution）

第八章　計畫的民主主義における自由（Freedom in a planned Democracy）

本書を通読して先づ誰しもがその惱裡に刻み込まれる印象は舊い秩序と支配の上に安座する現存社會機構が、その現象の背後に幾多の矛盾撞着をはらみつゝも、デモクラシーの一言をもつて、飽くまでもこの危機感をやわらげようとする俗流的偏見に對する、忌憚ない攻撃の鋭さであろう。すなわちラスキーはこの危機感をいみじくも『生産關係と生産諸力の矛盾である』（Its relations are in contradiction with its forces of production）と喝破し、しかもこのような危機の克服は十八世紀的デモクラシーの强調によつてではなく、二十世紀的デモクラシーによつてのみよく成し得るとしたことこそ、本書の骨子をなすものであろう。そしてその二十世紀的デモクラシーこそ、正にラスキーによつて新しく創り出された『計劃的民主主義』の概念にほかならない。ラスキーのいわゆる計劃的民主主義がどのような具體的内容をもつか、その探求は後に讓るとして、われらは先づその手初めとして現代の精神について、ラスキーの語るところを聞かねばならない。

既に述べた如く、現代をフランス革命にも比すべき社會的な大變革期であることは冒頭に述べるところであつて（P.5）、本書は實にとのような現代の劃時代的意義の强調をもつて、その卷頭を裝飾されている。然らば一體現代は何故に革命的であり、しかも劃時代的であるか。ラスキーによれば、末期的現象として現代文明の特徴は、信仰の欠如とそれより結果する不安及び恐怖の感情であり、崩壞期の文明はすべて信仰の欠如を悼むのを常とする。そしてこの不安と恐怖こそは、やがて現代を革命的ならしめる一切の要素を醸成する（P.15）。

それにも拘わらず、現代の社會にいわば宿命的なこの不安と恐怖の感情は本來この不安を除去すべき政治家達の無氣力と熱情の缺如によつて益々倍加されてゆく。現代の英國の政治家達にとつて、最も驚異とするところはソビエット連邦のかつて見ざる急速な發展であり、ドイツ並にイタリヤを中心とするファシズムの侵略的傾向であつた。だがここに注目すべきことは、イタリヤのアビシニヤ侵略、スペイン動亂、ヒットラーのチェッコ侵略等、一連のいわれなき侵略行爲に對して、かねて自由を揚言する英國政治家達は一體何をなしたであろうか、ラスキーは言う。

「然らばヒットラーの六年間を通じて、英國政府が、このヒットラーの侵略をひきとどめるために、敢えて何等かの一貫性ある施策を講じなかつたのは何故であるか。その理由としては少くとも英國の指導者乃至支配者層にとつて、この態度が、直に戰爭を誘發せしめるという危惧の念であつた。そして是は實にチェーンバレン氏に云いうるところである。一九三一年以後の英國政治家達の態度を見よ、彼等は日本の滿州侵略を見逃し、イタリヤのアビシニヤ侵攻を默認した。更に彼等はチェッコスロヴァキヤの見殺しをさえ敢えて辭しなかつた。彼等はソ連が折角平和の方向に動いてゐたにも拘わらず、ポーランド、ルーマニヤ、ギリシヤなどの半ファッショ國家の運命と同じく、ソ、チェ兩國を見たのである。このようにしてチェーンバレン氏及びその幕僚はファシストの輕蔑を買うに至つた」（P.22-23）

ラスキーの英國政治家に對する批判は辛辣である。そしてその非難は、當時の首相チェーンバレン氏に集注的に向けられている。すなわち英國の支配階級、就中チェーンバレン氏とその幕僚達が徒に新思想の蔓延と、新秩序新社會の必然を極力回避しようとする無益な努力、由なき恐怖心を鋭く指摘する、ラスキーはこのような恐怖心こそが、やがて批判的精神への道を塞ぐと斷言する。アリストテレスの言をまつまでもなく、支配階級の恐怖心こそが、平和な民主政治を破壞して悲慘な專制政治を展開せしめる霉素である。（P.32）

ラスキーが現代文明を破壞と更に又混亂にみちびくものとして第一に指を屈したものは支配階級の無氣力と恐怖心であつたが又支配階級をしてこのような態度に出でしめたものが、勞働

者階級の勢力の增大であつたことは云うまでもない。

「われわれの文明をとりまく恐怖は、その原理において、大部分の人々が不正であると感ずるところの事態の結果である。われわれは、同樣な革命的な特徴を有するところの各々の時代において、同樣の現象を發見することが出來る。」(P.31)

そしてその矛盾のあらわな姿は、時代によつて相異こそあれ現代においては政治上のデモクラシーと經濟上のデモクラシーのさけ難い不均衡であり、換言すれば飛躍的に增大しつゝある生產力と、かつて個人の自由と平等を目的として、一切の生產關係を規制していた法律とが鋭い矛盾に陷つたこととすなわちラスキーによつて好んで用いられた「生產關係と生產諸力の矛盾」とは、實にこのような意味にほかならない。

「政治上のデモクラシーにおける富者の信念は、その諸原理がもはや經濟の面には適應し得ないという無言の假定によつて條件づけられているのである。」(P.33)

しかも所有關係をめぐるこのような葛藤は、勞働者階級における宗教的信仰の沒落と反比例的に、社會制度批判のための合理的精神の把握によつて、社會的危機感を濃厚ならしめてゆく。まことに安全とは支配階級にとつては、彼等自身の利益を全國民の利害に一致させようとする試みにすぎない。

彼のジェレミー・ベンサムによつて、個人の利益と全體の幸福とを調和させるゴスペルとして、十九世紀を風靡した『最大多數の最大幸福』の理念は、その內部に安全と平等の矛盾を包むことによつて、革新的性格とともに、圖らずも時代の試煉に耐え得ない保守的性格をあらわにしなければならなかつた。そしてその矛盾が集注的に表現された時代こそ、正に二十世紀の現代ではないだろうか。ともあれ、ラスキーによればこのようないわば社會的な危機を切り拔けるために、とりうる手段は次の三つの中の何れかであると主張される。卽ち、

「(一)　支配階級が望み通りに、政治を行いうるという、その能力に對する人民の不信を除いて局面を回復すること。

(二)　勞働者階級の歷史的な施設——それによつて、勞働者階級の支配能力が一つの活動に組織されるのであるが——を攻擊するために、常に支配階級の政治的なあらわれの主要な形式であつたところの民主主義を破壞しなければならない。

(三)　生產關係の生產諸力への適應をゆるすところの根本的な變化を開始しなければならない。言い換えれば、歷史的現象として稀に見る同意による一つの革命に著手しなければならない。」(P.33)

このような舊いデモクラシーの破壞と新しいデモクラシーの創造とそは、まことに現代の人々に課せられた嚴肅な課題であつて、二十世紀前半の五十年間はこの苦悶のために終始したというも過言ではあるまい。そしてもしもラスキーとともに、二十世紀をもつてデモクラシーにおける、保守的、革新的二重性の苦悶の時代として把握することが、許されるならば、ロシヤにおけるボルシェヴイキの革命とドイツ及びイタリヤを中心とするファシズム・ナチズムの擡頭こそは、それぞれその革新的もしくは保守的性格において、何れもデモクラシーの前進と破壞という點において劃期的な大事件であつた。

だが問題は舊いデモクラシーの破壞にあるのではなく、新しいデモクラシーの創造と建設にこそ、その焦點はあつめられねばならない。ラスキーはこのような意味において、ロシヤ革命とファシズムを捉える。

三

ロシヤ革命が二十世紀の世界史上に占める地位が如何に大であるか、そしてその影響がいかに深刻であつたかは、あたかもフランス革命の十九世紀における關係に等しいものがある。しかしながらこの革命を單にロシヤ人によつてのみ行われたとするならば、それは必ずしも正しいとは云えない。むしろある意味において、われわれが近代史と呼ぶ理念の實現の過程に他ならない。(P.48)

かつて碩學ゾンバルトはその初期の傑作「社會主義と社會運動」(Werner Sombart, Sozialismus und soziale Bewebung, 1908) の冒頭に、「社會主義とは、近代的社會運動の精神的沈澱である」と述べているが、之をラスキーのロシヤ革命に對する見解と比較するならば、その解釋の相異において興味深い。ラスキーによれば、ロシヤ革命は十六、七世紀の政治的な革命なくしてはありえず、又產業革命の衝擊なくしてはありえなかつた歷史的な大事件である。否そればかりではない。ホッブス、ロック、ルソー、ヘーゲル、このような近代思想家の理念と方法、とりわけカール・マルクスの思想が圖らずも、この事件を契機として現象したものであると。(P.48) ゾンバルトと比較するならばラスキーの歷史觀と革命に對する見解は不徹底な二元論的色彩があるにもかゝわらず、結局においてやはり唯物史觀に同情的である。

「けだしロシヤ革命の經驗は、革命以前には全く知られていなかつた多くの新しい結果を生じた。……革命というものは、もしそうでないならば、發揮させる機會をもたなかつたと思われるところの新しい才能の貯藏所を開設するというかつての經驗を改めて確信させたことである。すなわち若し十七世紀の名譽革命がなければ、クロムウェル (Cromwell)

や、アイアトン（Ireton）リルーバン（Li-bourne）やウインスタンレイ（Winstanley）が歴史の脚註にあらわれなかつた如く、ロシヤ革命なくしては、レーニンもトロツキーもむしろ歐州諸國を流浪するもの淋しい亡命家であつたであろうし、又スターリンの如きは、財産法に對して大膽な攻擊をなすものとしてわづか半インチの新聞記事となつたであろう。（P.85）

ロシヤ革命を口にするとき、何人もその腦裡に思い浮べることは、それが西歐デモクラシーの理念との著しい背離であろう。それがいわば西歐デモクラシーの、アンチ・テーゼたる役割を果したものであるという事實は、西歐諸國におけるファシズムの遠原の火の如き蔓延と、此が增大の前に全く無力であつたデモクラシー諸國の運命に徵して明らかである。（P.86）ロシヤ革命におけるプロレタリヤの獨裁は、かくの如くして西歐デモクラシー諸國の優柔不斷、とりわけドイツ社會民主黨の墮落、失墜、更に又ファッショ化によつて必然的でなければならなかつた。（P.87,88）人或は革命當初における秘密警察、異分子に對する血の粛正をもつて、全體主義的ファシズムと罵倒するかも知れない。しかしながらこのようなロシヤ革命の慘ましい悲劇を惹起せしめたものこそ、西歐デモクラシーの責任であることを深く反省する必要はないであろうか。ラスキーによれば、ソビエット政策の歴史は大略次の四期に分れる。

「第一期　一九一七――レーニン指導の終りまで……その目的の一つは世界革命を惹起することであつた。

第二期　一九二四――一九三四……その主要な目的は、ソビエットに對する資本主義陣營の團結をふせぐことであつた。

第三期　一九三四――一九三九……その目的はナチスの發成、出來れば日本の攻擊に備えて、安全を得ようとして、デモクラシー諸國の培養につとめることであつた。

第四期　一九三四――獨ソ不可侵條約の結論から、ソ連の對外政策ポーランド・フインランドにおける如く、出來れば戰略的な利益のための保護のために極力戰爭を利用しようとすることであつた。」（P.88）

而して此等の全期間を通じて一貫した政策は、異分子の容赦ない追放であつて、寛容、議會主義、自由な討論、此等はやがて消え失せようとする過去の追憶であろうとする。ラスキーは一世紀半に亘る長きを費して、英國に馴化された宗教的な寛容の精神のみが、ロシヤ革命の歴史を批判するための唯一の基準ではないことを戒めてゐる。（P.89）ボルシェヴイストに寛容の心を暗示することは、恰も清教徒をしてローマ舊教との妥協苟合を勸告することであり、無益の業にすぎない。誠にボルシェヴイストの運命はピュアリタンのそれと同じである。モスコーは共産主義者の「メッカ」と云うも過言ではあるまい。（P.245）

ラスキーは更に言葉を續けて、ロシヤ革命の衝激について物語る。

「しばし勞働者階級を除けば、われらの祖先がフランス革命に對して表示したよりも更に猛烈な憎惡をロシヤ革命に對して明らかにしなかつた人は稀であることは記憶に値する……。その醜惡さと殘酷性とは、二つながら範圍の廣いものであり、且つ、その大失錯は、宗教改革以來の歴史上における重大事件である。という事實にわれわれの眼を覆わしめるものではない。實にロシヤ革命こそは、その結果の上に打ち立てられた希望と不安とが、あまりにも大であつたがためにほとんどすべての人に冷靜に思索することを許さない題目となつた。すなわち、ロシヤ革命を支持する人々は、希望のあまり、ソビエット同盟の指導者に缺陷なしと主張し、一方恐怖の感情は、反對陣營の人々をしてロシヤ革命の明らかな完成にもかゝわらず、その完成は眞實でないと論議させるに至る。……だがロシヤ革命についてその最も緊急の課題は、それが必要するところの賞讃や非難ではなくして、その理解の必要性である。」（P.253）

ラスキーはこのように述べて、ロシヤ革命に對する黨派的偏見や感情的激昂を抑制して、科學的な冷靜さを要求する。それならば、ラスキーによつて把握されたロシヤ革命の理解とは一體どのようなものであろうか。

フランス革命にとつて恐怖政治が必然的であつた如く、ロシヤ革命にとつてプロレタリヤの獨裁は切り離すことの出來ない重要性をもつ。ロシヤ革命においてプロレタリヤの獨裁がなされなければならなかつた客觀的な條件として、西歐デモクラシーの內的矛盾とその脆弱性であつたことは既に指摘したところであるが、それならばレーニンのいわゆるプロレタリヤ獨裁の理念は、一體どこからみちびき出されたか。

「その理念の起源は、レーニンよりもはるか以前に由來する。私は思うのであるが、その一部はルソーの立法者の觀念にまで直接にさかのぼりうる。ルソーの立法者とは受け入れる準備の出來ていない人民に、その目的を課することによつて理想の國家を實現しようとする人である。そしてこのような見解はジネヴァのカルヴィンの子孫に固有なものであつて、人間というものは、社會制度によつて毒されて來たという彼の深い信念が彼からバブーフ（Babeuf）及び、その共謀者達につたわつた。彼等はフランスにおける彼等の希望が邪惡な人々によつてうち破られるのを見た。そこで彼等は陰謀的な獨裁を「德に至る强制」の過程として考えた。バブーフ

から、ブオナロティ（Buonarroti）や、十九世紀の四十年間における發生期のヨーロッパ民主主義の祕密團體を通じて、そういう考え方はマルクス及び社會主義運動につたわつた、であるから、レーニンその流託のきびしさの中にいかに彼がそれをプロレタリヤ獨裁の理念に變形したかは容易に窺われうるところである。すなわち、プロレタリヤ獨裁とは、ルソーの立法者の類推により、「…制的に人間を解放する」ことであつた。」（P. 83.80）

ラスキーは、ロシヤ革命におけるレーニンの態度が獨裁政治にもかゝわらず、極めて合理的なものであつたことを認めるにやぶさかではなかつた。レーニンは、いわゆる革命後の獨裁政治が、ともすれば陷りがちな弊害を除去するために、次の二つのことをなしたのである。すなわち、つねに憤慨することなく重要な批判をゆるしたことであり、又レーニンが相當援助を被つてゐる人々から、大衆の反感の下地をつくることをつねにさけたのである。（P. 83）まことにこのようなレーニンへのなみみならぬ寛容さに比べて、後繼者スターリンへの批判は、何かが憎悪にちかい激しさが感ぜられる。

「スターリンが、此等の可能性を排除するところの一つの型の上に、彼の獨裁政治をうち建てたということは、スターリンの技術における弱點であつた。彼はいつも勝利を得なければならない。彼はいつも正しくなければならない。彼はいつも成功しなければならない。彼はいつも信じて叱責することの出來る非難すべき人をもたねばならない。そしてそのことは彼の最も親密な僚友もその支配力においては不安定であることを意味し、そして是は又反對に、彼が依らなければならぬ忠誠が、稀にしか……合理的な信念にもとづく自然の忠誠でないことを意味する。」（P. 82.83）

だがラスキーのロシヤ革命に對する同情的な態度は、あくまでも同情的であるにとゞまつて、それを一歩も出るものではない。なぜならばとりわけスターリンのナチズムとの妥協苟合とその結果としてのフインランドへの攻擊、ベルト海への進出などが、假に戰爭阻止のための、已むを得ざる傳統的な政策であるとしても、それはなお『戰略的帝國主義』（Strategic Imperialism）と呼ばれるべきものであり、ソビエット以外の諸國の勞働者階級の運命に無關心な、スターリン政策のあらわれであると斷言するからである。（P. 83.38）しかもこのような批判にもかかわらず、これは又ボルシェヴィズムに對するすぐれた寛容にかわつてゆく。

「ロシヤ革命の安全が、ソビエット自體の內部的なもろもろの要因にかかわるものではなく、むしろそれは、その外部的な諸要因に、いかに多くかかわるものであつたかは、ナチズムの徹底的な敗北が大きくもたらした狀勢の變化がソビエット自體にとつては、まことに外部的な攻擊の脅威からの解放であつた。更に又その結果としてのソビエット同盟內部のデモクラシーの促進は必然的に自由と安全とをもたらすであろう。」（P. 83.86）

ナチズムの徹底的な擊破のために、ソビエット同盟の力がいかに與つて大なるものがあつたかは、今更再言を要しない。そしてその限りにおいて、民主主義史上にソビエット同盟の功績は高く評價されねばならないが、唯問題はかくの如きソビエットの態度が、西歐民主主義諸國に對するかつてない衝擊とともに、更に自らの內部に、何かしら民衆に對して、一つの覺醒として作用しないであろうか。

「スターリンの支配下にあるソビエットの獨裁は、ツァーリズムのビザンチン的傳統を實行している。そのもろもろの結果は、西歐的な解放の要素であるよりも、ペートル大帝のそれによりちかい感じを受ける。われらは、軍事的な挫折がない以上、それらの結果は結局は獨裁者の權力に宿命的であることとは已むを得ないことを承認せざるを得ない。……ソビエットを知る人は何人も、その結果が外部的な安全が確保されるとき、疑惑をもちはじめ、上から課せられるところの統一のかわりに、下からもり上るところの統一を要求するであろうと思われるところの態度をかき立てるであろうということは疑うことは出來ない。このような態度がどのように長く發展してゆくか、何人も語り得ないと思う。……」（P. 84.86）

こゝに英國勞働黨員としての冷やかな批判が、ボルシェヴィズムに加えられている。ファシズムの擡頭に際して周章狼狽、殆んど爲すところを知らなかつた西歐デモクラシーに失望し、ソビエット・ユニオンの鐵の如き堅固に驚き且つ讃嘆したラスキーは、プロレタリヤ獨裁が實は西歐デモクラシーの、アンチ・テーゼたる役割を果したことを自ら認めざるを得なかつた。だがこの嚴然たる事實は、勞働黨員としての彼にとつて、まことに忍び難いものではなかつたろうか。デモクラシーの再生こそラスキーにとつて唯一の課題であるとすれば、西歐デモクラシーの復位は、ソビエット社會における內在的な批判と、現存社會のアンファン・テリブルたるファシズムに對する克服と否定とを通じて、おし進められてゆかねばならない。

四

ラスキーは先づ、ファシズムの酵母となるものが、實に失望せる國民的野心であることを强く指摘する。言い換えるならばファシスト黨の隆昌は、資本制社會の發展と高度化に伴われて

必然的に現われざるを得ない矛盾、すなわち企業の合同連合によつて、著るしい經濟的脅威をうけた中小市民階級の絶望的な憤滿がいやがて彼等を奴隷化すべきファシスト黨に、その勃興の氣運をあたえたとする。（P.88）それは一見勞働者農民等のプロレタリヤ階級に訴える如く見えて、その資金は大企業から出資され支配階級の妥協と苟合とにおいて成長したものである點で、反プロレタリヤ主義であることは言うまでもない。

「彼等は抵抗の恐怖に對しては、多かれ少なかれ、テロ組織によつて、彼等の敵對者を破り、且つ將來あり得べき敵愾心の源泉となるような一切の組織を、一掃しなければならない。彼等は單一政黨國家を建設した。そしてその本質とそは政黨の組織と國家權力との機能の一致であつた。」（P.88）

從つてそれは、フランス革命以來の人間尊重の個人主義的見解を否定して、個人は單に目的のための手段として墮落する。ファシズムは、このような國内における人格無視と、その不安を覆わんがために、何よりも先づ國外における光榮（"Glory"）の追求に沒頭して戰爭を誘發する。即ち疎外された人民は、自己の幸福をうばわれ、あやまれる愛國心にあざむかれつゝ、前進する。（P.89）ファシズムをもつて、腐敗せる獨占資本主義の一般現象として理解するマルクス主義者が、それを次のような特質において把えたことは妥當である。

（一）階級關係にはふれない。（二）零細階級の幸福の無視（三）勞働組合・社會主義政黨の破壞。（四）大衆の生活水準の低下。（五）ブルジョワ・デモクラシーの破棄。（P.89）

このようにいわばマルクス主義的に、ファシズムの本質を把握するラスキーは、以下ドイツにおけるナチズムの擡頭を可能にした客觀的狀勢の分析に入つてゆく。

ファシズムの何よりも敵とするところのものが、勞働組合と社會主義政黨であることは、ファシズムそのものが、ブルジョワ・デモクラシーの破壞を常とする以上當然であるが、先づその手始めとしてなされたものは、民族主義昂揚を名として行われたユダヤ人に對する迫害であつた。そしてこれこそは實に勞働運動指導者と同じく、異分子と見做されたからである。

「一八一九年後のドイツ及びイタリヤの病理學的狀態の中で挫折、失敗の觀念をとりのぞき、そして暴力に訴えても、それに代えるに侵略的な償いを見出そうと熱望していた非常に多くの人々があつた。そして彼等が主として、攻擊したところの人々は、資本家によつてはげしく嫌われた勞働組合主義者であるか、若しくは國民生活において、異分子と見做されたドイツのユダヤ人であつた。ファシストの暴力は、殆んど未來の秩序に對する一つの貢獻として寛大に見られた。すなわち、未來の秩序の中では、勞働組合運動は潰滅せしめられ、

從來まで、ユダヤ人が持つていた地位と財産とは、平等の條件では、彼等と競爭し得ないところの人々に開かれるであろうというのである。」（P.89）

かくして極端な民族的國家主義をその楯として、ファシズムは己が途中に横たわるすべての障害を打ち拂わんとする。しかも革命失敗後のドイツ社會民主黨の腐敗墮落は、かえつてプロレタリヤ大衆を右傾せしめる結果、ファシズムの國民的傳統主義の喧傳工作は効を奏し、ドイツ共産黨を完全に壓倒するに至つて、勞働者階級の分裂は加速度的に速められてゆく。

「はげしい幻滅のさ中にある國民にとつて、誇張された國民主義こそは、殆んど必要な奢侈品である。ファシストが、その過去の光榮を主張する一方、左翼は憶い出が、祕密にしておいたところの數多くの追憶の記を完全に破棄することを要求した。ファシストの喧傳の技術が、この點において彼等の敵手よりも確實な期待と一致し、又之を掴んだということは殆んど疑い得ない。私は考えるのであるが、ファシストの權力の保持が、過去の敗北を償うに足る行動を意味するという主張は、左翼の喧傳からは常に缺けていたところの知覺力への一つの指標であつたのである。」（P.90）

更にファシズムへの安全瓣としての左翼の壓力を弱める役割をなしたものは、社會改革におけるその革命的な教義であつた。本來、安逸と惰性に生きる人民にとつて、いかなるものであるにせよ、拔本的な變化が忌むべきものである以上、左翼の革命的な理念はファシズムのごとなき攻擊の對象となり、ファシズムをして益々勝利への信念を堅めさせたことは疑うべくもない。ファシストはこのようにして、プロレタリヤ大衆の生活權の擁護を叫ぶ勞働組合主義者を、國民的傳統主義に背反する暴力主義者として貶するとともに、他方人民大衆を慰撫するための手段として失業問題に對處し、それによつて戰後の敗北主義的な考え方を拂拭しようとする。このようにしてファシストにとつて國民的傳統、或は國家的威信を維持するための再軍備は、一方において失業問題の解決策として現われ、他方それは人民大衆を、再び奈落の底にたゝき込む帝國主義戰爭への序曲となるにすぎない。

「私がここで懸念して强調しなければならないことは、ファシスト黨の指導者が、それぞれの場合に彼等自身の權力を不斷にするという利益において彼等をして、勞働者階級及び資本家階級の支配者とするために國家權力を使用したことである。彼等は失業問題を解決することによつて、利潤を制限することによつて、最初からある承認を得た。彼等は勞働者階級の向上の機關を廢止し、且つ、產業機械をはげしく運轉させることによつて、すべての者から承認を得た。そしてこれこそ

わが國民的威信の復活と相等しいものであつた。そしてその恐怖こそは各國民の領土擴張への道となり、領土擴張の結果として、絶え間ない利潤の見込をもつからである。……

このような計畫の脆弱性は明らかである。すなわち、それは國内におけるその征服を維持するために、國外における征服によつているからである。（P.92）

さてラスキーがマルクス主義者のファシズム觀を把握したことは、さきに述べたところであるが、彼は今一歩ファシズムの本質についてのその見解を深めてゆく。

「それならば、ファシズムの本質は何であるか。それは衰退期にある資本主義の結果である。それは資本制社會に包含された生産諸關係をのりこえようとするデモクラシーに對する有産者階級の利害の反駁である。だが、それはたゞにデモクラシーの絶滅を意味するばかりでなく、それは又資本家的衰退への指標であるところの缺點を、それによつて、とり除くという希望をもつて、國外的な冒險の政策を正當化するために、國民的感情を利用することである。

ファシズムが成功しているところは何處でも、それは勞働者の增大した要求に對する資業者側の利益による抗議の上に打ち立てられて來た。そして、その資本家側の抗議を有効にするために、資業者側の利益は、事實、國家權力の維持のために、その代償として勞働者階級の壓力を抑えることを承諾したところの、目立つた傭兵隊長及びその傭兵達と同盟を結んだ。しかしながら、その傭兵隊長は彼が、國家を手に入れるや否や、彼はつねに、資本主義の傳統的な外形を復活させることが出來ないだけでなく、それを、そこに打ち棄てゝおくことも出來なかつた。……

傭兵隊長は、自己の權威を維持しようとする熱狂的な欲望以外に、眞實の理論をもたなかつた。……　彼が考える唯一の價値とは、彼の成功に役立ちそうだと思われるものである。彼は、まことに、最も悪い意味で行動上のマキャベリーの君主である」（P.93）

明かに、このような資本制經濟組織のいわば私生兒としてのファシズムは、恐怖の上にうちたてられ、征服がもたらす恐怖と希望とによつて組織され、維持された權力にすぎない。そしてその事實はイタリヤにおけるファシズム、ドイツにおけるナチズム擡頭の歴史が、われわれに物語るところであろう。ラスキーは以下數頁に亘つて、その間の事情を詳しく描いているが之を要するに、ファシズムが文明に對する反逆であることは、ラスキーをまつまでもない。まことにファシズムこそは、人民大衆をして、いわゆる『迷える羊』たらしめるものであり、ファシズムの勝利は、人間の理性に對する醜い慾情の奴隷の勝利である。由來ファシズムの哲學を追求する幾多の試みがなされた。人或はカントをもつて、フィヒテの國家主義をもつて、そして又ニーチェをもつて、ファシズムの源流とするかも知れない。しかしそれは無益の勞である。ファシズムの根底にあるもの、それは唯、理論なき虚無主義というほかはない。（P.107）

「ファシズムの勝利は、人々が人生における共通の理想目的を見出し得なくなつた時代に、どのような社會においても可能である。それは正に崩壞に急ぎつゝある社會の表現である。それは恐怖の力が希望の力よりずつと大であるがために、秩序の力は民衆の同意を得られなくなつたということを意味する。……法律の尊重は、法律の目的の中に、もはや共通の信念が缺けているが故に、死滅しつゝある。社會の各集團は、それが、その窮極の善と一致するところの利益が、既に脅かされているのを見る。社會が安全であるということはもう過ぎ去つたのである」（P.110）

法律の權威が失墜するのは、主として生産關係と生産諸力が鋭い矛盾に陷つた時であつて、一八七一年のパリー・コンミューンの如きはその例である。このようにして法律が無視され秩序がみだれるところに平和のありようはずはない。ファシズムのあるところ、必ず人民の間に不信とテロリズムが横行し、猜疑と沈滯が社會にみなぎるに至る。

ハロルド・ラスキー「現代革命の省察」を讀む

ラスキーはファシズムの勃興に契機を與えたものが、國民的野心の失望であるとし、更にその人民に對する絶對的支配を完成して、己が膝下に隷從せしめたものこそ、一方においては支配階級のファシズムに對する鎮撫政策、すなわち過度の寛容であり、他方コミュニズムに對する人民大衆のいわれなき偏狹であるとする。いうまでもなく、ドイツの支配階級もファシズムの擡頭を、好意をもつてみたわけではない。たゞドイツ並にイタリヤの支配階級の憎悪は、かかつて勞働組合の活動にあつたがために、ファシズムの勞働政策に賛意を表して、いわゆる毒を以て毒を制し、かくて漁夫の利を占めようとしたものにほかならない。いいかえるならば、ファシズムと支配階級とを結びつける妥協のきづなは、ファシズムがその性格として、ブルジョワー・デモクラシーを破壞するにもかゝわらず、それが階級關係には殆んど手を觸れなかつたからである。

ファシズムの擡頭と暴威とは、あきらかに、人類の歴史がその終末に近づきつゝある何よりの證據である。しかもこのファシズムの運動に參加した人々の多くが、資本主義社會の高度化とともに、やがてその社會的な地盤を失うべき中産階級（those disappointed and declasse sections of the masses）の子弟であつたという事實は、われわれに何ものかを暗示せずにはおかないであろう。ファシズムのはげしい攻撃によつて、滿身に

創痍をうけた民主主義は、今や已の脆弱な地盤を再認識すべき時にある。何故なれば民主主義は、危殆に瀕しているからである。

民主主義！　一體それは何者であろうか。一九三三年ナチスドイツの勃興によつて、祖國を追われたエドアルト・ハイマン教授が云つた次の言葉は、民主主義自體の危機をわれわれに教えるとともに、われわれの耳にし、口にするデモクラシーが、何ものであるかを意味深くほのめかしてくれる。『世界はあきらかに民主主義から離れている。……すなわち民主主義は民主主義に反對せんとする人々によつてさえも、無視しえざる道德的權威を持つているということである。それらの人々は、彼等が民主主義を撲滅しようとして、彼等の力を糾合している間にも、民主主義という名前の魔力を呼び求めざるを得ない』と。(E. Heimann, Communism Fascism or Democracy? 土屋清・土屋弘共譯一―二頁) まことに、デモクラシーの危機は、このようなそれ自體の保守的革新的性格の二重性から來るものではなかろうか。そしてこのデモクラシーの危殆は、そのまゝ資本制社會そのものの、巨大な基盤をゆるがすものでなくして何であろうか。(未完)　一九五〇・一〇・一

《附記》　本書の紹介は既に石上良平教授によつて行われている。(東洋經濟「ブック・レヴュー」第十四卷) 筆者は不幸にして、參照することの出來なかつたことを遺憾とする。この拙い論文は、教授の紹介によつて補われるところ極めて多いことゝ信ずる。心ある讀者の併讀をお願いする。尚、今年の「思想」九月號は「ラスキー」特輯號として彼の生涯、業績、思想に關する有益な論文が掲載されてゐる。且つ又、本書は、最近笠原美子氏によつて飜譯、「みすず」書房から前半だけが出版された。なお、本論文は未完であることを附記しておく。

書評

古島敏雄著

『近世における商業的農業の展開』

――社會構成史大系第八回配本――

服部謙太郎

一

德川幕藩體制が元祿享保時代を劃期として解體過程に入り、農村構造が著しく變貌をとげてゆくことは、今日一般に認められている事實である。この變化は、農村構造を規定する農業經營の面からみるならば、いわゆる地主手作經營に代つて、零細小作經營が支配的になつてゆく過程であろう。零細小作經營の特色は、從來の自給自足的經營におけると異つて、貨幣支出による赤字を補うために、商業的農業への依存度が著しく高まつている點にある。そしてこの商業的農業の發展こそは、江戸時代社會のもつ矛盾の表現であると共に、封建社會を否定する契機の成長過程でもあつた。こゝに少くとも近代社會への發展の可能性が生れたことは事實であるが、しかし、商業的農業の展開、貨幣經濟の普及といつた現象が直ちにそのまゝ近代化への道を意味するものでないことは、こゝに説明するまでもない。江戸時代後期の商業的農業の展開は、地作手作的農民層を寄生地主と零細小作層とに分解せしめたが、近代社會成立の推進力たるべき、西歐の富農＝獨立自營農民の如きものは、遂にその間に生ずることがなかつた。その理由はどこにあるのか。この問題を解決するためには貨幣經濟の農村への浸透が農民層の分解とどのような關係をもつて行われてゆくかを、各地方の農業經營の具體的分析を通じて明らかにしてゆくことが何よりも必要であろう。このような意圖による最初の試みは、故戸谷敏之氏によつて行われた。(註一) 戸谷氏は自給肥料か購入肥料かという肥料形態の差異を基準として、江戸時代農村を東北型（東北日本型）と近畿型（西南日本型）とに分け、更にこれを各地方の經營收支計算例の分析によつて吟味した結果、これらの型が單なる地域型ではなく、經濟發展の型を示すものであることを明らかにした。この見解は江戸時代の人々も漠然と乍ら意識していた農業技術の東北と近畿との對比を、學問的に推し進めたものであり、結論としては一應誰しも承服出來るのであるが、何分にも蒐集資料が頗る限られている上に、各地域の交換經濟への入り込み方の動態的理解が欠けている點は、欠陥として指摘されざ